

武林イヴォンヌ年譜

Yvonne TAKEBAYASHI

— Index chronologique —

長谷川 洋

Yô HASEGAWA

小説家武林無想庵（55歳）は1934（昭和9）年1月妻と娘をパリに残してマルセイユから単身帰国の途に就いた。妻文子（46歳）は当時エチオピア皇太子と日本の子爵令嬢との婚儀を取材すべく奔走していたため、小学校を終えてリセの中学部に進んでいたパリ生れの娘イヴォンヌ（日本名は五百子、1921（大正10）年生まれ、14歳）は武林夫妻の知人で南仏クロ・ド・キヤーニュ *le Clos de Cagnes* 在住のコヴィ夫妻にあずけられてニースのリセに通うことになる。

イヴォンヌが生まれたのは武林夫妻の最初の外遊時（1920（大正9）年～1922（大正11）年）のことである。夫妻は1923（大正12）年にイヴォンヌを連れて再渡仏し、滞欧生活を続けていた。この十年あまりの間には夫妻は別々に帰国もしているが、イヴォンヌを伴うことはなかったため、彼女は2歳から3歳までの短い期間しか日本を知らない。

本稿は、父と母の間、日本とフランスの間で翻弄されるその後のイヴォンヌの生涯を年譜の形でたどったもので、1920（大正9）年から1934年までを扱う旧稿「武林無想庵のフ

ランス滞在」（中部大学女子短期大学紀要「言語文化研究」No.9, 1998；増補訂正稿は未発表）に入らなかった無想庵の最後の渡仏（第五次）の記事を含む。イヴォンヌ本人に関する事項には◎を、武林無想庵・武林（のち宮田）文子の消息のほか、直接間接彼女に関係のある事項には*を付して区別した。年齢は数え年による。

1934（昭和9）年 14歳

2月 ◎クロ・ド・キヤーニュのコヴィ夫妻方に預けられ、ニースのリセに通う。

* 2月6日、武林無想庵、午前九時神戸入港の靖国丸で帰国。

* 2月、文子、アントワープの貿易商宮田耕三を知る。

* 2月20日・28日・3月1日・2日、東京朝日新聞に武林の「文芸時評」(1)～(4)が載る。

* 「中央公論」3月号に武林の「靖国丸」が載る。

* 春、文子、パリからアントワー

ブに移る。

- * 4月，文子，武林に手紙を送り結婚解消の希望を告げる。
- * 「中央公論」10月号に武林の「無想庵由来記」が載る。
- * 11月11日，武林，成城の野上豊一郎邸を訪問し，エミール・ゾラの翻訳の岩波文庫編入を相談。「武林さんはスガモの家のゲンカ [ン] でちらと見てから殆ど二十年なり。異人さんが来たとき父さんにとりついで位，外国人臭くなってる。」（野上弥生子）
- * 12月14日，東京朝日新聞に武林の書評「無極隨筆」が載る。

1935（昭和10）年 15歳

- * 「中央公論」2月号（第567号）に武林の「無想庵由来記」（第二回）が載る。
- * 2月1日，第一高等学校校友会発行の安江豊太郎編『橄欖樹』[第二輯]（校友会雑誌第三百五十号記念，一高文芸部）に武林の「おゝ，一九〇〇年！」が載る。
- * 4月27日，武林，野上邸にゾラ「大地」の訳稿を届ける。

5月 ◎クロ・ド・キヤーニュの教会で聖体拝受；式服で記念写真を撮る。

- * 文子，宮田耕三と共に帰国。
- * 9月10日，河出書房刊『バルザック全集』第15巻「中篇

集」に武林無想庵訳「エーヴの娘」が収められる；巻末に「訳者の言葉」（2ページ）を附す。

- * 10月5日，武林，中央公論社創業50周年の祝宴に出席（於歌舞伎座）。
- * 10月6日，武林，西銀座「きゅうべる」で永井荷風と懇談。
- * 10月15日～20日，東京朝日新聞に武林の「島崎藤村様」（一）～（五）が載る（18日は休載）。
- * 11月14日，武林，林芙美子『牡蠣』の出版記念会に出席。
- * 11月20日，文子，武林に会って離婚の承諾を得る；以後，文子はアントワープで宮田と暮す。

* 同日，武林，文子を東京駅まで送り，その足で「夜明け前」の完成を祝う会（於芝三線亭）に出席；藤村に再渡仏の意向を語る。

- * 11月，武林，東海道を西へ下る旅に出，途次静岡で蒲原有明を訪問，12月上旬比叡山に登り，翌年8月まで滞在。

1936（昭和11）年 16歳

* 1月20日～24日，東京朝日新聞に武林の「観音行 一第一信」（1）～（5）が載る。

◎年が明けてまもなく文子クロ・ド・キヤーニュに来訪；コヴィイ夫妻と相談の結果，卒業まで同家で暮すことになる。

- ◎ジョージ五世（この年1月20日没、28日に大喪）の葬儀記事が載った雑誌「マリアンヌ」を武林に送る。
- 3月3日 ◎パリの大学都市日本館のパーティーで日本舞踊を披露する；文子とポーリン・チェック（日欧混血のダンサー）が共演；留学生高橋義夫（のち北大医学部教授）と知り合う。
- * 4月20日、武林の『流転の書』が岡倉書房から出る：「「絶望の書」覚書」, 「続「絶望の書」覚書」, 「靖国丸」, 「東京の散歩」, 「新東京の悩み」, 「追憶のカケラ」, 「一婦朝者のコシマア」, 「鳩小屋の住人」, 「女といふもの」, 「観音行第一信」, 「無想庵由来記」, 「ゾラ因縁」を収め後記を附す。
- 5月 ◎ニースのリセを卒業；パリに出て15区のラカナル通りrue Lakanalにある読売新聞特派員松尾邦之助のアパルトマンで4、5日間を過し、迎えに来た文子とアントワープに行く。
- * 5月24日～28日、東京朝日新聞に武林の「第二 観音行」(一)～(五)が載る。
- * 6月、宮田耕三・文子、シベリア鉄道で帰国、東京で結婚届出。
- * この年(?) 文子、道頓堀角座に出演。
- 7月 ◎アントワープから武林に手紙を送る。
- ◎映画会社PCL（フォト・ケミカル・ラボラトリー「写真化学研究所」の略称、のちの東宝映画）入社の話が日本から来る。
- ◎PCL入社に備えて、モンパルナス駅に近いドランブル通りrue Delambre 9番地のアパートの5階をアトリエとして文子と日本舞踊の稽古をする；象牙彫刻家岡本豊太郎が週に2、3回踊りの指導に来る。
- * 7月17日、武林、ブエノス・アイレスで開催の国際ペン・クラブ大会に出席する島崎藤村を神戸で見送る。
- * このころ100円=616フラン。
- ◎この年(?) 早川雪洲が映画「吉原」(モーリス・デコブラ原作、田中路子主演、1937年封切)撮影のため12月にパリに来ることになり、文子はイヴォンヌを出演させようと運動するが実現せず。
- 12月 ◎ペン・クラブ大会の後アメリカを経てパリ滞在中の藤村を文子とともに1、2度訪ねる(藤村は11月26日パリ着、12月13日にパリを発ち帰国)。
- 1937(昭和12)年 17歳
- * 1月1日発行の「あみ・ど・

ぱり」（東京巴里会発行）第4巻第1号に望月百合子「無想庵を思ふ」が載る。

2月16日 ◎ドランプルで睡眠薬を飲み自殺を図る。

* 「無想庵氏の娘／自殺を図る／家庭の悩みから」（20日、東京朝日新聞）、同盟通信特派員井上勇が19日に打電；この報道では「南仏海岸に於て」とある。

◎文子、アントワープに戻るにあたりパリ大学都市日本館館長の山内氏にイヴォンヌの保護を依頼；しばらく日本館に移る。

* 「婦人公論」4月号に武林無想庵「イヴォンヌ服毒の秘密」が載る。

* 「婦人公論」4月号に林達夫「子供はなぜ自殺するか」が載る。

* 「中央公論」4月号に齊藤茂吉「童馬小言」が載る（全12編、「4 武林イヴォンヌ」を含む）。

4月7日 ◎復活祭休暇中にドランプルに戻って再び自殺未遂。

* 「又も自殺企つ/無想庵氏愛嬢 【パリ7日発同盟】 (...) 原因は前と同様厭世とみられるがイヴォンヌさんは去る二月自殺に失敗してから数回

モンパルナスのお母さんの文子女史の家を飛び出し家人も警戒中であつた」（8日 [9日付]、東京朝日新聞夕刊）；ニュース映画でも報道される。

4月12日 ◎武林からイヴォンヌの保護を依頼する電報を受取ったルブロン・ゾラ Denise Le Blond-Zola 夫人がドランプルに来訪；同夫人はゾラの娘、著書に『娘の語るエミール・ゾラ』“*Émile Zola raconté par la fille*” (1931) がある。

* 11日・12日付読売新聞報道（松尾邦之助による）に高橋義夫の名が出る。

* 「【パリ12日発同盟】イヴォンヌは「私は日本なんか行きたくありません私は日本は大嫌いです」と駄々をこねてゐる」（13日 [14日付]、東京朝日新聞夕刊）。

◎滞仏中の精神科医M（三浦？）博士の精密検査を受ける。

◎アントワープに帰る。

◎日仏間に電報の往復しきり。

* 5月20日、武林、島崎藤村・川田順・佐藤春夫・徳田秋声らの援助を得て神戸を發ち、シベリア鉄道でパリに向う；これが第五次にして最後の渡仏となる。

5月末 ◎文子とドランプルに戻り、武林

の到着を待つ。

◎スコッチテリアを飼いキチ (Kitty?) と名づける。

* 武林, アントワープに寄って 宮田耕三に会い, イヴォンヌの住所を聞く; 6月6日早朝にパリ到着。

6月6日 ◎武林と再会。

* 「パパに会へて嬉し／駄々っ 児イヴォンヌ心解けて／相抱く無想庵父子【パリ6日発同盟】 (...) 「私は父に会いたくありません, 日本へ帰るのなんか真平です」と云つてゐたイヴォンヌさんはこの早朝始終彼女の面倒を見て居た親友某氏を訪れ「いやだ, いやだ」と駄々をこねてゐたが親友の忠告によつて漸く午前十一時半頃モンパルナスの自宅に帰り始めて父無想庵氏と対面した (...)」(7日, 東京朝日新聞)。

* 「イヴォンヌ一人帰国／パリに又親娘“相克”【パリ7日発同盟】 (...) 金銭の問題で又復父と母娘との間に意見衝突し, 結局無想庵氏はパリに残りイヴォンヌ嬢だけ故国に帰る事になる模様である」(8日, 東京朝日新聞)。

* 7日, 武林はパリ20区ガンベッタ広場近くの「カントリ・ホテル」(カピテーヌ・マレシャル通り rue du Capitaine-

Maréchal 1 番地) に1箇月分先払いで部屋を借り, 原稿執筆に専念; のち15区パストゥール病院近くの吉田保方(デュトー通り rue Dutot62番地) に同居して自炊。

◎一人でドランプルのアパートに住み, 文子は時々アントワープから来る。

◎しばしば松尾邦之助のオフィスを訪ねる。

◎松尾邦之助の弟でこの6月にパリに来た松尾正路(小樽高商で仏語を教える)と食事に行ったり散歩に出かけたりする; 「細く背丈の伸びた, 肌の色が透き通るように蒼いこの娘」は「左の手首にいつも白い繻帯を巻いていた」(松尾正路)。

7月 ◎このころ帰国の意思を固める。

* フラン暴落, 100円=760フランとなる。

* 7月10日, 中央公論社社長嶋中雄作から帰国旅費500円が届く; 武林の打電に答えたものの。

* 「無想庵父子帰国【パリ11日発同盟】 巴里で無一文になった武林無想庵氏が又もや旧友の情で近く帰国する (...) 一方イヴォンヌさんも父無想庵氏とは別々に日本に帰る決心を固め母親の文子さんは彼女の旅費を整へるため日本舞踊の会を催す準備中」

(12日、東京朝日新聞)。

◎夏に文子とイタリアを旅行か。

* 8月ごろ、武林は工芸家H氏のアトリエの一隅を借りて住む。

* 8月半ば過ぎ、松尾正路、文子から夫妻でしばらくアントワープを離れるので留守宅に来てイヴォンヌを監督するよう依頼される。

◎「キチ」を連れてアントワープに行く。

◎このころエーテルで自殺を図るようなそぶりを見せる。

* 「婦人公論」9月号に武林イヴォンヌ「乙女のひめごと」(武田武志訳)が載る。

* 「婦人公論」9月号に武林文子「母の受難」が載る。

9月? ◎パリに戻る。

* 「婦人公論」10月号に武林イヴォンヌ「乙女のあこがれ」(武田武志訳)が載る。

* 「婦人公論」10月号に武林文子「母の受難」続稿が載る。

* 「中央公論」10月号に武林無想庵「イヴォンヌ通信 一第一信一」が載る。

10月1日 ◎ロンドンから一等船客として香取丸に乗船。

* 6日、武林、リヨン駅からパリを発つ。

* 7日、武林、マルセイユから同じ香取丸に三等船客として乗船。

◎同船の山田耕筈からピアノのレッスンを受ける。

* 「中央公論」11月号に武林無想庵「イヴォンヌ通信 一第二信一」が載る。

11月8日 ◎午後4時基隆寄港、午後7時出港。

* 「▶ イヴォンヌ嬢は語る／ずつと小さいときに日本にみたきりで日本語は少ししか解りません (...) 中央公論社の島中社長がいろへと世話して下さるので着くまでは同氏の許で暮し何れは父と一緒に生活します、今のところ大体東宝映画に入社することになつてゐます (...) 【台北電話】」(10日、東京朝日新聞「青鉛筆」)。

11月12日 ◎午前9時半神戸入港。

◎向島の中平家(文子の縁者宅)に滞在。

◎本郷森川町の徳田秋声所有のアパート「フジ・ハウス」2階13号室に入居(武林も別室に入居); 秋声の三女百子と親しくなる。

12月1日 ◎東宝映画入社(PCLは9月1日に東宝と合併し東宝砧撮影所と

なった)；月給100円；映画出演の機会なく1年後退社。

◎小学生時代フランスで知った辻まこと・山本夏彦と再会，以後毎日のように会う。

*12月13日，武林，あらくれ会忘年会に招かれる（於虎ノ門満鉄ビル）。

*「婦人公論」昭和13年新年号に武林イヴォンヌ「日本に帰る!!」が載る。

*「中央公論」昭和13年新年号に武林無想庵「諸法因縁生—イヴォンヌ通信—」が載る。

1938 (昭和13) 年 18歳

1月 ◎柏木の田辺茂一宅で催された徳田秋声を囲む新年の集いに武林とともに出る；門下生のほかに上司小剣，宇野千代，深尾須磨子，真杉静枝，窪川稲子，村岡花子，阿部艶子が来会；これをきっかけとして以後ときおり紀伊国屋書店に立寄る；「洋装の良く似合う，異国風の，痩せぎすの美しい少女」(田辺茂一)。

1月3日 ◎武林の妹田村光子と伊香保に遊ぶ。

◎田村光子の配慮で神田小川町の田村家の隣家を借り，武林と同居する；2階ふた間1階ひと間で家賃33円は「フジ・ハウス」ふた間分と同じ。

◎田村光子の勤めるYWC Aに通い始めるが3週間ほどでやめる。

◎一人で京都に旅行，成瀬無極を訪ねる。

◎生活に関して武林と意見の合わぬことが多くなる。

22日 ◎深夜，辻まことの勤める銀座数寄屋橋茶廊の前で探しに来た武林と諍いになる。

◎辻まこと・山本夏彦とともに一時中野の友人宅に移る。

*「婦人公論」2月号口絵「私のお友達」に徳田百子と並ぶ写真が載る。

*「婦人公論」3月号「私の恋愛観 女優はどんな恋愛を望んでゐるか」に武林イヴォンヌ「恋愛への憧れ」が載る。

*「中央公論」4月号に武林無想庵「無想庵の悩み」が載る。

4月 ◎パリで文子と交際のあった女性の経営する自由が丘のカフェに住込みで勤める。

◎このころ犬を飼いハムレットと名付ける。

◎いったん小川町に戻るが，すぐ砧村(成城)のアパートに移る；武林も代田2丁目の武蔵野荘に移る。

*「中央公論」6月号に武林無想庵「無想庵の悩み」(第二回)が載る。

6月 ◎山本夏彦と口喧嘩となり以後しばらく絶交。

◎武林とともに上山草人宅に招かれ，若手俳優たちと会食。

* 「改造」8月号に武林無想庵「新方丈記」が載る（火野葦平「麦と兵隊」掲載号）。

9月16日 ◎武林とともに永井荷風を訪問；浅草で舞台に立ちたいと話す；「オペラ館」の経営者に紹介される。

◎辻まことと結婚，大森（馬込村弁天池そば）のアパートに住む。

* 11月20日・23日，武林無想庵訳ゾラ『巴里の胃袋』上・下が改造文庫に入る。（未見）

* 文芸春秋社発行の「話」12月号（第6巻第13号）に武林無想庵・内田百閒・井伏鱒二・長山正太郎・古居七三郎の座談「貧乏生活やりくり話の会」が載る。

* 武林，北沢五丁目波多朝子方に移る。

12月5日 ◎渋谷の「寅八」（波多朝子経営）で誕生祝の会；武林も招く。

11日 ◎浅草公園で偶然荷風と会い「オペラ館」の楽屋に案内される。

* 文子，イヴォンヌのためにヨーロッパの品を日本船の船員に託して送ってくる。

◎この年（？），武林と代田の萩原朔太郎邸を訪問：「アメリカから帰ったばかりだというイヴォンヌさんは，色白の華やかな顔立ちで，年もずっと私より上らしく落ち着いて座っている

のだが，私はイヴォンヌさんをちょっと見ただけで変なきごちなさを覚え，おどおどしてしまった。おまけに日本語がよくわからないというイヴォンヌさんは，一言もものをいってくれないのだ。（…）父は二人をうちとけさせようとして，しきりに話題をさがして，イヴォンヌさんに話しかけるのだが，「そうです」とか「いいえ」というきりでおしまいになってしまう。私の方も同じなのだ。父はさも困ったようにしているが，イヴォンヌさんの方は退屈そうにマニキュアをほどこしたきれいな指先で，ハンカチをいじっているだけなのであった。」（萩原葉子）

1939（昭和14）年 19歳

◎このころ（？）新宿二丁目の西洋居酒屋「ナルシス」の常連となる。

* 6月13日，山本夏彦が佐藤春夫宛の紹介状を求めて武林を訪問；「雑談して深更に及んだ。イヴォンヌの話になると，長くなっていけない」（山本夏彦）

* 「芸林」第2巻第2号（2月号）に武林無想庵「支離滅裂集 Ⅲ 成吉思汗」が載る；同第3号（3月号）に「支離滅裂集 Ⅲ [ママ] 玉ねぎの匂（→）」が，同第6・7号

(6・7月合併号)・第8号
(9 [ママ]月号)・第9号(10月号)に「(小説)旧馬耳塞六十日記」が載る。

* 武林, 新宿二丁目酒房「ピカデリー」(波多朝子経営)二階に移る。

1940 (昭和15) 年 20歳

◎ 武林と福田トク(登久子)に同行して石神井の辰野隆邸を訪問; 福田トクは光子の学友でこれまで名古屋に在住, 昭和8年文部省中等教員資格検定仏語科合格, 昭和9年高等教員検定仏語科合格。

◎ 自由が丘のアパートに移る(山本夏彦によれば世田谷区奥沢2-256奥沢アパート新館8号)。

12月4日 ◎ 長女野生うまれる; のち辻まことの友人竹久不二彦(夢二次男)の養女となる(竹久野生は画家, 現在コロンビアのボゴダ在住)。

* 武林無想庵訳ゾラ「地」が昭和16年にかけて全三冊で鄰友社から出る; 附録別刷「ゾラ因縁」1・2を附す。(未見)

1941 (昭和16) 年 21歳

◎ 野生をつれて「ナルシス」に顔を出し, 文学志望の学生たちと交際。

◎ このころ(?) 辻まことと共に堀田善衛の友人宅の2階(のち

に「汐留サロン」と呼ばれる)に顔を出し, ここに集まる若い詩人たちと交際。

* 7月, 山本夏彦訳レオポール・ショヴォ『年を経た鰐の話』が桜井書店から出る; 付録「栞」には佐藤春夫と武林の推薦文を載せる。

11月3日 ◎ 武林と波多朝子との結婚披露に出席; 徳田秋声, 上司小剣, 正宗白鳥, 尾山篤二郎, 上村清延, 向井潤吉, 山内善三郎, 脇屋義人, 生方敏郎, 加藤謙, 澤田卓爾, 祖川孝らが集まる; 鳥崎藤村は前日に長文の電報で不参を連絡。

* 11月3日 坂口安吾, 「新宿の無想庵のバー」(「ピカデリー」)に石川淳の案内で来店; 若園清太郎の出版記念会(於銀座「エーワン」)の二次会。

* 武林, 夜は新宿の喫茶店「居留地」(同じく波多朝子経営)に泊る。

* 12月10日, 河出書房刊『バルザック全集』第15巻「中篇集」に武林無想庵訳「エーヴの娘」が収録される; 巻末に「訳者の言葉」(2ページ)を附す(昭和10年版の普及版)。

1942 (昭和17) 年 22歳

* 5月, 宮田夫妻ブリュッセル

に避難。

- ◎次女維生うまれるがまもなく死去。
- 11月 ◎辻まこと、東亜新報に入社、妻子の世話を友人今日泊亜蘭に託して天津に赴任；今日泊は本名水島行衛、水島爾保布の長男、『むさうあん物語』には太郎の名で出る。

1943（昭和18）年 23歳

- * 1月2日、武林、緑内障のため左眼も失明。
- * 新宿「ピカデリー」閉店。
- 6月 ◎おくれて天津に行き、盛徳里の社宅に入る。
- 年末 ◎辻まこと東亜新報を退社、青島に行く。

1944（昭和19）年 24歳

- ◎この年帰国か？
- ◎疎開した水島に代わって馬測量司（慶応仏文出身、辻まことや水島の友人）が時々訪れて面倒を見る。
- ◎辻まこと徴用され陸軍報道班員となる。
- ◎三女生れる；次女とおなじく維生と名づける。
- * 4月から5月にかけて、武林夫妻、静岡、京都、大阪、四国を巡って旧知を訪う。
- * 川田順「武林無想庵来」五首

（4月23日の日付を持つ；昭和20年8月10日養徳社刊『歌集 吉野乃落葉』所収）。

- * 宮田夫婦、夏ごろベルリンに逃れる；のち、疎開してきた他の日本人と共に郊外のマースドルフ城で暮す。
- * 11月10日、武林一家千葉県東條村の掛松寺に疎開。
- * 11月24日、辻潤没；辻まことは年末年始にかけて（あるいは翌年はじめ？）一時帰国。

1945（昭和20）年 25歳

- * 1月9日、武林夫妻の疎開先が失火消失し、書き溜めた原稿も失う。
- * 5月、宮田夫妻、他の残留邦人とともにベルリンを列車で発ち、6月にハルビン着；同地に1年ほど留められる。
- * 6月19日、武林夫妻、旧知を訪う旅に出る。
- * 6月20日、武林夫妻、青森県黒石の秋田雨雀を訪問、同地の岡崎旅館に一ヶ月滞在；7月23日、東京から移動証明を届けに来た朝子の長男市川廣康とともに水島爾保布のいる新潟に発つ。さらに金沢、京都（廣康は単身帰京）、奈良、名古屋を経て中央本線で東上、甲府で終戦を知り、千葉に戻る。
- ◎辻まこと、現地召集で出征。
- ◎辻まこと、河北省冀東で終戦を

迎える。

1947 (昭和22) 年 27歳

1946 (昭和21) 年 26歳

* 春ごろ、松尾邦之助帰国。

◎この年? 辻まこと復員引揚げ。

10月中旬 ◎辻まこと・イヴォンヌ、子供を連れて松尾邦之助を世田谷区赤堤の寄寓先に訪ねる。

* 10月、宮田夫妻、在ハルビンの引揚日本人に加わり40日かけて博多経由で帰国；文子は大阪で中古バス2台を購入して改造、1台を住いとし、もう1台を店舗として喫茶・ピヤホール・レストラン「ミスタンゲット」を筋違橋西、江戸堀南通に開業（当時の写真にBUS BEER GARDEN “MISTINGUETT”の文字が見える）；進駐軍将校事務所から将校宿舎に至る道筋のほぼ中間に位置し、MP本部やCamp-Osakaも近い（昭和25年2月まで営業か?）。

* 10月、武林の「暗中望郷」が北日本社（札幌市）発行の「北方風物」第1巻第10号（あきあぢの巻）に載る。

* 11月、武林の「アルバム」が「北方風物」第1巻第11号（昔噺の巻）に載る。

* 12月上旬 武林、「AMATEUR DE SPONTANÉ」を徳田一穂宛に送る。

* 1月、武林の「アルバム(2)」が「北方風物」第2巻第1号（お正月の巻）に載る。

* 7月、武林夫妻、文京区森川町に移る。

◎辻まこと上京。

* 文子、このころ生花店も経営。

* 中部日本新聞社発行の「物語」10月号に武林無想庵「モンブラン・アルプスの一夏」が載る（カット：久富浩）；タイトル下のカット中に「無想庵物語」とある。

* 「芸林閑歩」第17号（11月号）「徳田秋声・人と文学」に武林無想庵「おもひでニツ三ツ」が載る。

* 「世界文学」15号（11月号）に武林無想庵「サフォ追憶記」が載る。

* 「世界文学」16号（12月号）に武林無想庵「イヴォンヌの周囲 — サフォ追憶 2 —」が載る。

1948 (昭和23) 年 28歳

* 1月5日、武林一家、四谷左門町に移転。

* 6月28日星光書院発行の「虚無思想研究」(1)に武林無想庵「ふらぐめんた」(1925年執筆)が再掲される。

- ◎辻まことと別れる。
- ◎維生を連れて大阪に移る。
- ◎文子が阪急沿線の園田に開いた欧風料理作法研究所「コルドン・ブルー」で西洋料理の指導やエチケット講習を手伝う。

- * 9月30日、武林の『無想庵独語』が朝日新聞社から出る。
- * 11月（?）、武林、熱海で正宗白鳥・谷崎潤一郎と鼎談；舟橋聖一も同席；なお白鳥は翌日も小林秀雄と対談（「大作家論」）。
- * 武林無想庵訳ドオデエ『サフオ』が大泉書店から出る（新選世界文学集）。（未見）

1949（昭和24）年 29歳

- * 1月（?）、武林の談話が「春返り咲く人」として「新大阪新聞」に載る：「文子とイヴォンヌのことですか、昔からヒューマニストである私は、彼女らのことは一切干渉しません。文子は大阪でカフェーをやり、イヴォンヌは東京で辻潤氏の息子の一 [まこと] 氏と一緒にいることだけわかっています。それでよい。」（『放浪通信』に収録）。
- * 1月20日、大泉書店から武林無想庵訳シュエ『巴里の秘密』が出る（新選世界文学集）。（未見）
- * 4月30日、武林無想庵「トランス・シベリアン」を収め

る労農救援会編『自由の旗の下に —私はなぜ共産党員になったか』が三一書房より刊行される（文末に —21—2—1949— と記す）。

- * 5月8日、武林、文化学院での「辻潤追悼 虚無思想講演会」で「辻潤と私」と題して話す；8月28日星光書院発行の「ニヒリズム研究」(3)にその要約筆記が載る。
- * 「展望」5月号（第41号）に武林無想庵と中村光夫の「対談 文芸回顧」が載る。
- * 「苦楽」6月号（第4巻第6号）に武林無想庵「放浪記」が載る（宮田重雄装画）。
- * 「展望」7月号（第43号）に武林無想庵「藤村のこと」が載る。
- * 「小説界」第2巻第5号（8月号）に武林・谷崎潤一郎・正宗白鳥の鼎談「青春回顧」が載る（巻末「編集後記」に「前に雑誌「新生」が企画したものであるが、事情あって本誌に譲り受けて掲載することにした。」と記す）。

◎「ミスタンゲット」は料理もコーヒーも好評で主に進駐軍関係を顧客として盛業；文子は外出がち；イヴォンヌは店で働くほか近所に注文を届けたりもする；「細身で背が高く（...）気の強い人で、何か陰のあるような？とところがありましたがおおらかな優しさが」あった（小島

正次氏)。

◎この年(?)、朝倉晃仁と結婚；朝倉は1928(大正7)年生れ、1948(昭和23)年から中国新聞記者、「ミスタンゲット」の常連客。

*10月2日、武林、日比谷公園野外音楽堂での「世界平和擁護大会」に出席。

*11月、文子はイヴォンヌにあとを任せて上京し、バスを改造した会員制レストラン「メイゾネット・ジプシー」を三田四国町で開業(松尾邦之助は「三田の慶応の近くの空地」に「文子のバー」を開く、とする)；三島由紀夫や女流作家たちも来店；翌年まで営業か？；閉店後も跡地にはなおしばらく中古バスがオフィスとして置かれていた(市川しげ子氏談)。

*文子、東京で20年ぶりに宇野千代と再会；「文子の一代記を書いてみたい」という宇野のために11月末から木挽町の宇野邸で速記者を招いて口述。

*文子、「スタイル読物版」に「歌姫ツネ子」を書く(未見)。

モナコの妖姫 武林文子夫人の情炎秘録」が載る。

3月(?)◎再び上京。

◎「英文毎日」に勤める(翌年まで?)。

◎水島行衛が毎日新聞社に来訪、戦後はじめて会う；「身なりなんかも、当時としては、まことにいいものを身につけて、リュウとした感じ」(水島)。

◎山本夏彦を交詢社ビルのオフィスに訪ねて再会。

*宮田耕三、貿易会社駐在員として単身ベルギーに渡航、ブリュッセルに住む。

*9月20日発行の「中央公論」文芸特集号第4号に谷崎潤一郎・川田順・武林無想庵の座談会「女と感覚の世界」が載る。

*10月1日、武林文子『ゲシュタポ』が酣燈社から出る；ベルリンでの八ヶ月の見聞にもとづく。

*11月30日、河出書房より『世界文学全集〔十九世紀篇〕ドーデー サンド篇』に武林無想庵訳「サフオ」が収録される(第22回配本)。

1950(昭和25)年 30歳

*「夫婦生活」(夫婦生活社)3月号(第11巻第3号)に杉原啓之介[松尾邦之助]の「〔夫婦生活昭和裏面史〕(一)

1951(昭和26)年 31歳

*2月8日、武林夫妻、熱海に谷崎潤一郎を訪問、以後13日帰宅するまでに佐佐木信綱・小牧近江・有島生馬・山川智

応・昇曙夢・中村光夫・長谷川如是閑・藤森成吉・尾山篤二郎・松本恵子らを歴訪。

* 2月10日、文子、宇野千代と共に渡欧；宇野は4月12日に一人で帰国；文子は以後頻繁に海外と日本を往復。

* 3月24日、河出書房より『世界文学全集〔十九世紀篇〕ゾラ篇 ナナ』（武林無想庵訳）が出る（第30回配本）；市川光次・石川謙一の解説を附す；帯に「（翻譯権取得）[...] 譯者武林氏は一九二九年パリーにあってゾラ的全譯を意圖し、今日盲いた身に鞭打つて畢生の大業としてナナを譯了された。氏の流麗な含蓄ある譯筆はゾラの文學を的確に捉えてこの人ならではの感を必ず與えるであろう」と記す。

* 武林の「ただ一つの物語を」が毎日新聞社発行「毎日情報」4月号（「わたしの小伝」）に載る。（未見）

* 7月15日、三笠書房よりエミール・ゾラ作武林無想庵訳『大地』上巻が出る（世界文学選書126）。

* 武林、雑誌「コスモポリタンジャーナル」10月号に寄稿？

* 三笠書房よりエミール・ゾラ作武林無想庵訳『大地』下巻が出る（世界文学選書127）。
[未見]

礼に出席。

◎市ヶ谷ビル2階の「工作社創立事務所」に山本夏彦を訪ね、武林への見舞いの礼を言う。

◎武林方のクリスマス・イヴの集いに出る。

1952（昭和27）年 32歳

2月 ◎維生とともにブリュッセルに移る。

* 3月20日、武林文子『この女を見よ』がコスモポリタン社から出る；表題作の他に「乳房の恋」を併収。

* 5月15日 第一出版社発行の「人間探求」第25号に武林無想庵「まぶたのパリ」が載る。

* 6月30日、河出書房刊の日本近代文学研究会編集「現代日本小説大系」第30巻「石川啄木 荒畑寒村 平出修 上司 小剣 小川未明 長谷川如是閑 宮地嘉六 武林無想庵 宮本百合子 集 新理想主義 8」（第54回配本）に「ピルロニストのやうに」と「[Cocu]のなげき」が収録される（編集・解説 荒正人）。

* 河出書房から『世界文学全集ゾラ篇』の学生版が出る（未見）。

12月30日 ◎朝倉晃仁、宮田耕三に招かれてベルギーで働くことになり単身神戸を發つ。

12月 ◎義弟市川廣康・小林しげ子の婚

1953 (昭和28) 年 33歳

2月19日 ◎朝倉, マルセイユで下船, パリを経てブリュッセルに行く。

1954 (昭和29) 年 34歳

◎ヨーロッパ視察旅行中の知人山藤に会い「パパを見舞いに行くときはチーズを忘れないように」と話す。

◎「ブリュッセルの家に、もと武林無想庵夫人、文子さんが娘のイヴォンヌさんを連れて訪ねてきた。何の用でだか知らない。その後、パリだったかベイルートだったか忘れたが、また二人でみえた。武林無想庵の名前は聞いたことがあるが、山本夏彦著「無想庵物語」を読むまではどういう人物なのか知らなかった。当時文子さんはかなり有名だったらしいが、私たちの家に来た時は、何か、うらぶれた料理屋のおかみといった感じで、イヴォンヌさんも若い頃の美しい面影はなく、すごく変わって見えた。」(河野鶴代)；筆者は外交官夫人として1954年2月から8月までブリュッセルに、次いで1957年までパリに、さらに1961年までベイルートとアンマンに住んだ。

1956 (昭和31) 年 36歳

◎ブリュッセルで海外貿易振興会の通訳を勤める；1958年のブ

リュッセル万博まで勤務か；以後ヨーロッパを訪れる日本人の案内をすることしばしば。

◎この年12月以降(?), 文子がヨーロッパ十数都市での日本人形展を企画, 文子を助手席に乗せてイタリア・スイス・フランス・スペイン・ポルトガルなどへ自動車で旅行, 2年ほどの間に6万キロに及ぶ。

* 武林無想庵「めくら記」が「新日本文学」1月号に載る。

* 「めくら記(二)」が「新日本文学」4月号に載る。

* 「めくら記(三)」が「新日本文学」5月号に載る。(末尾に(無想庵物語めくら記 一部終)と記す)

* 武林無想庵「すぼんたね記」(一)~(四)が「随筆」9月号・10月号, 「随筆サンケイ」11月号・12月号に載る。

1957 (昭和32) 年 37歳

◎維生(14歳)がリエージュの女学校に入学し寄宿舎に入る。

◎アルコールと睡眠薬に頼ることが多くなる。

◎この年(?), 朝倉晃仁と別れる。

* 1月, 谷崎潤一郎, 佐藤春夫, 辰野隆, 正宗白鳥, 長谷川如是閑を発行発起人とする「むさうあん物語」の賛助会員募集がはじまる。

* 2月25日, 筑摩書房『現代日

本文学全集』70（「田村俊子集・武林無想庵集・小川未明集・坪田譲治集」）が出る；「ピルロニストのやうに」, 「性欲の触手」, 「第十一指の方向へ」, 「文明病患者」, 「Cocu」のなげき」を収め, 唐木順三「武林無想庵」と年譜（昭和5年刊改造社版『現代日本文学全集』所収の自筆年譜に加えて昭和5年から31年までを口述）を附す。

- * 6月10日, 『むさうあん物語1』（武林朝子筆記, 無想庵の会発行）が出る；限定300部, 番号入り, のち増刷700部。
- * 8月25日, 『むさうあん物語2』が出る。
- * 11月7日, 『むさうあん物語3』が出る。

1958（昭和33）年 38歳

- ◎文子と共に一時帰国。
- ◎ブリュッセルへの帰途, カイロに立寄る。

- * 「随筆サンケイ」8月号に武林無想庵「あのころ 一辰野隆博士への手紙一」が載る。
- * 「新日本文学」9月号に武林無想庵「広津和郎君へ」が載る。
- * 『むさうあん物語』, 第8冊まで刊。
- * 山本夏彦, 「木工界」昭和34年1月号より「日常茶飯事」の連載をはじめる。

1959（昭和34年） 39歳

- 春 ◎文子企画の「古代エジプト写真展」（翌年4月日本橋三越で開催, 読売新聞社後援）の資料収集のため, あらためて文子とおよそひと月カイロ, ルクソール, アスワン, ヌビアを旅行。
- ◎旅行記を執筆する文子のために4月から10月にかけて資料収集や参考書の翻訳を手伝う。

- * 『むさうあん物語』, 第14冊まで刊。

1960（昭和35）年 40歳

- * 4月20日, 宮田文子『スカラベ ッタンカアモンの宝庫』が中央公論社から出る；ジャケット袖に「宇野千代さんの読後感」を掲載。
- * 7月, 武林, 練馬区下石神井に転居。
- * 「中央公論」9月号に宮田文子「黒い恐怖の国・コンゴ」が載る。（未見）

- ◎維生が宝塚歌劇団に入る（昭和39年まで在籍）。

- 9月（？）◎著作権協会国際連合の大会に出席するため渡欧しブリュッセルにも立寄った西条八十・嫩子父娘の通訳と案内をする；「面長で, 長身で, おしろい気のない, ボーイッシュな美人」（西条八十）；翌日, 西条父娘は宮田夫妻からウォータールーの別荘に

招かれ、イヴォンヌも同席；このとき「ブリュッセルのアパートで女友達と暮し、宮田耕三の関係する観光事業〔日本観光協会？〕を手伝っている」と語る；「かなり色黒で無愛想だが清楚な気品のある人（…）うしろ姿は十六、七の少女のようにすらりとし、彫像のように均整がとれていて、どうしても日本人とは思えぬ爽やかさだったが、なぜかふと孤独の影を私は直感した」（西条嫩子）。

* 『むさうあん物語』、第18冊まで刊。

1961（昭和36）年 41歳

3月 ◎文子と共に一時帰国。

* 文子企画の「コンゴ写真展」、日本橋三越と大阪阪急で開催（朝日新聞社後援）。

* 8月10日、宮田文子『ゲシュタポ』が中央公論社から再刊される；裏表紙に宇野千代「ユダヤ人迫害の実録」を掲載。

* 10月、文子、ヒマラヤ奥地フンザ王国に旅行。

* 『むさうあん物語』、第20冊まで刊。

1962（昭和37）年 42歳

* 3月20日、『むさうあん物語21』が出る。

* 3月27日、武林無想庵没（83

歳）。

* 3月30日、文子のフンザ旅行記『七十三歳の青春』が朝日新聞社から出る。

* この年（？）、文子、健康法のレコード「七十三歳の青春 桃源郷」を出す（未見）。

* 7月10日、『むさうあん物語別冊 武林無想庵追悼録』（市川廣康編）が出る。

* 10月10日、『むさうあん物語22』が出る。

1963（昭和38）年 43歳

* 『むさうあん物語』、第27冊まで刊。

1964（昭和39）年 44歳

* 『むさうあん物語』、第30冊まで刊。

1965（昭和40）年 45歳

* この前後数年（？）、文子、日本各地でヨーロッパ風手芸品の展覧会を開催。

◎文子企画の「ヨーロッパ食べ歩き展」（翌年伊勢丹での開催を予定）のために働くことが決る。

12月25日 ◎ブリュッセルのアパートで急死。

* 『むさうあん物語』、第34冊まで刊。

1966（昭和41）年 没後1年

1月3日 ◎ローマ中央墓地に埋葬される；同日、帰国中であった文子の依頼により聖イグナチオ教会で追悼ミサが行われる。

* 3月10日、宮田文子『刺青と割礼と食人種の国 ー黒い秘境コンゴー』が講談社から出る。

* 文子、ローマ・ミラノ・フィレンツェを経てブリュッセルに帰る。

* 5月25日、文子の自伝『わたしの白書 幸福な妖婦の告白』が講談社から出る。

* 6月、文子、カナリア諸島ラスパルマスを商用で訪問後帰国。

* 6月25日、文子、東京で没（79歳）；のち宮田耕三によって芦屋に母娘合葬の墓碑が建立される。

* 『むさうあん物語』、第39冊まで刊。

1969（昭和44）年 没後4年

* 4月19日、講談社版『日本現代文学全集』105「現代名作選(-)」に武林無想庵の「ピルロニストのやうに」が収録される（小田切秀雄「作品解説 作家入門」、「武林無想庵年譜」を附す）。

* 8月、『むさうあん物語』、第45冊を出して完結。

1972（昭和47）年 没後7年

* 6月30日、市川廣康、記録文化社を創業。

* 7月10日、武林朝子筆記『武林無想庵盲目日記』が記録文化社から出る。

1975（昭和50）年 没後10年

* 12月19日、辻まこと没（63歳）。

1985（昭和60）年 没後20年

* 5月26日、講談社版『日本現代文学全集』105「現代名作選(-) 増補改訂版」に武林無想庵の「ピルロニストのやうに」が収録される（小田切秀雄「作品解説 作家入門」、「武林無想庵年譜 改訂増補」を附す）。

1989（平成元）年 没後24年

* 11月26日、宮田耕三、ブリュッセルで没（89歳）。

参考文献

* 『むさうあん物語』、無想庵の会、1957（昭和32）～1969（昭和44）年

* 『武林無想庵盲目日記』、記録文化社、1972（昭和47）年。

* 中村正幸採譜、年譜「武林無想庵 その生涯」。武林無想庵『放浪通信』、記録文化社、1973（昭和48）年、改頁第三部 pp.201～267。

- * 『朝日新聞縮刷版〈復刻版〉』, 日本図書センター。
- * 『朝日新聞記事総覧』, 日本図書センター。
- * 『新日本文学』復刻縮刷版』, 第三書館, 1993(平成5)年。
- * 「思い出のヒロイン告知板」: 「アサヒグラフ」, 1947(昭和22)年11月5日号, p.30。
- * 辰野隆対談集『忘れ得ぬことども』, 朝日新聞社, 1948(昭和23)年。
- * 武林文字『ゲシュタポ』, 酣燈社, 1959(昭和25)年; 中央公論社, 1961(昭和36)年。
- * 武林文字『この女を見よ』, コスモポリタン社, 1952(昭和27)年。
- * 近藤日出造「日出造見参『やァこんにちは』, 第百一回, 在欧三十年の宮田文字さん」: 「週刊読売」, 1955(昭和30)年6月26日号, pp.32~37。
- * 早川雪洲『武者修行世界を行く』, 実業之日本社, 1959(昭和34)年。
- * 宮田文字『スカラベ ツタンカアモンの宝庫』, 講談社, 1960(昭和35)年。
- * 松尾邦之助『巴里物語』, 論争社, 1960(昭和35)年; 『巴里物語【2010復刻版】』社会評論社, 2010(平成22)年(序文「エコール・ド・パリの石松」(鈴木嘉昭), 「[資料論文]『日佛評論』について—アミラル・ムーシェ街二十二番地—」(渋谷豊)を付す)。
- * 西条八十「ベルギーで会った女たち」: 「マドモアゼル」, 小学館, 1961(昭和36)年1月号(第2巻第1号), pp.224~225。
- * 萩原葉子『父・萩原朔太郎』, 角川文庫, 1961(昭和36)年。初刊1959(昭和34)年, 筑摩書房。
- * 宮田文字『七十三歳の青春』, 朝日新聞社, 1962(昭和37)年。
- * 『荷風全集』第二十二巻, 「断腸亭日乗 四」, 岩波書店, 1963(昭和38)年。
- * 宮田文字『刺青と割礼と食人種の国 —黒い秘境コンゴ—』, 講談社, 1966(昭和41)年。
- * 大宅壮一「世界を駆けめぐる78歳の“妖婦” 秘境コンゴの奇習から男性遍歴まで女傑・宮田文字さんの告白」(「人物料理教室 67」): 「週刊文春」, 1966(昭和41)年4月18日号, pp.114~118。
- * 宮田文字『私の白書 幸福な妖婦の告白』, 講談社, 1966(昭和41)年。
- * 「不死身の宮田文字さん 急死の原因」: 「週刊新潮」, 1966(昭和41)年7月9日号, pp.123~124。
- * 『秋田雨雀日記』第四巻, 未来社, 1966(昭和41)年。
- * 大岩誠「白鳥の人間味」, 「正宗白鳥全集付録」, 第7号, 『正宗白鳥全集』第1巻, 新潮社, 1966(昭和41)年。
- * 田辺茂一『裸像との対話 —わが縦横交遊録』, 富士書院, 1967(昭和42)年(富士現代創書)。
- * 『宇野浩二全集』第十二巻, 中央公論社, 1969(昭和44)年。
- * 松尾正路『地球の春—詩と批評の間—』, 春秋社, 1969(昭和44)年。
- * 『林達夫著作集 6 書籍の周囲』, 平凡社, 1972(昭和47)年。
- * 『斎藤茂吉全集』第六巻(隨筆二), 岩波書店, 1974(昭和49)年。
- * 『藤村全集』(新装版)第十四巻(東方の門巡禮 他), 筑摩書房, 1974(昭和49)年。
- * 『藤村全集』(新装版)第十七巻(書簡集・年譜), 筑摩書房, 1974(昭和49)年。
- * 西条嫩子『父西条八十』, 中央公論社, 1975(昭和50)年。
- * 永瀬義郎『放浪貴族』, 国際P H P 研究所, 1977(昭和52)年。
- * 巖谷大四『物語女流文壇史』, 上, 中央公論社, 1977(昭和52)年。
- * 矢内原伊作(編)『辻まことの世界』, みすず書房, 1977(昭和52)年。
- * 田辺茂一『あの人この人五十年 もいちの縦横交遊録』, 東京ポスト, 1978(昭和53)年。
- * 「辻まこと年譜」: 『辻まことの芸術』, みすず書房, 1979(昭和53)年。
- * 松原一枝「宮田文字」: 瀬戸内晴美責任編集『女の一生 人物近代女性史』, 第7巻, 「明治女性の知的情熱」, 講談社, 1981(昭和56)年, pp.219~263; 瀬戸内晴美(編)『明治女性の知的情熱 人物近代女性史』, 講談社文庫, 1989(昭和60)年, pp.225~263。
- * 岩橋邦枝「宮田文字 “稀代の妖婦” とうたわれた行動派の波乱万丈」(「シリーズ 女, を生きる」), 「With」, 1984(昭和59)年1月号, pp.169~172。
- * 軍司貞則『日本株式会社を育てた男—アント

- ワープのサムライ商人』、文芸春秋、1985（昭和60）年；『日本株式会社を育てた男』、集英社文庫、1990（平成2）年。
- * 『野上弥生子全集』、第Ⅱ期第四巻、「日記4」、岩波書店、1987（昭和62）年。
 - * 堀田善衛『方丈記私記』、ちくま文庫、1988（昭和63）年。初刊：筑摩書房、1971（昭和46）年。
 - * 山本夏彦『無想庵物語』、文芸春秋、1989（平成元）年；文春文庫、1993（平成5）年。
 - * 玉川しんめい『エコール・ド・パリの日本人野朗』、朝日新聞社、1989（平成元）年；『エコール・ド・パリの日本人野朗 松尾邦之助交遊録』、社会評論社、2005（平成17）年（玉川信明セレクション『日本アウトロー列傳』2）。
 - * 小場瀬卓三『巴里だより』、白水社、1990（平成2）年。
 - * 宇野千代「宮田文字」：『女の日記』、講談社文芸文庫、1991（平成3）年。初出：1973（昭和48）年。
 - * 宇野千代『生きていく私』、中公文庫、1992（平成4）年。初刊：毎日新聞社、1983（昭和58）年。
 - * 儀同保『独学者列伝』、日本評論社、1992（平成4）年。
 - * 「行動派マルチ女性 宮田文字」（「生きた、愛した、時代をつくった 日本を創った女たち96」）、「週刊女性」、1994年3月15日号、pp.182～187。
 - * 河野鶴代『帰還船—ある外交官夫人の思い出話—』、近代文芸社、1995（平成7）年。
 - * 林えり子『この人たちの結婚』、講談社、1997（平成9）年。
 - * 池内紀『見知らぬオトカム 辻まことの肖像』、みすず書房、1997（平成9）年。
 - * 宇野千代『幸福に生きる知恵』、講談社文庫、1997（平成9）年。初刊：講談社、1993（平成5）年。
 - * 山本夏彦「浮世のことは笑うほかなし」（聞き手 出久根達郎）：『文学界』、1999（平成11）年2月号・3月号。
 - * 清宮崇之「辻まこと年譜」：『江古田文学』46号、「[特集] 辻まこと—没後四半世紀—」、2001（平成13）年2月。
 - * 峯島正行『評伝・SFの先駆者 今日泊重蘭—“韜晦にして現わさず”の生涯—』、青蛙房、2001（平成13）年。
 - * 山本夏彦『「社交界」たいがい』、文春文庫、2002（平成14）年。初刊：文芸春秋、1992（平成13）年。
 - * 「武林無想庵からのメッセージ」：『室内』、2003（平成15）年1月号。
 - * 山本伊吾『夏彦の影法師 手帳50冊の置土産』、新潮社、2003（平成15）年。
 - * 田村隆一『自伝からはじまる70年 大切なことはすべて酒場から学んだ』、思潮社、2005（平成17）年。
 - * 『徳田秋声全集』別巻、八木書店、2006（平成18）年。
 - * 松尾邦之助『無頼記者、戦後日本を撃つ 1945・巴里より「敵前上陸」』、大沢正道編・解説、社会評論社、2006（平成18）年。
 - * 谷口雅春「交差なき眼差しの系譜—北海道は自らをどう見すえるか」：『photographers' gallery press』no 8、2009（平成21）年4月30日発行、pp.253～258。
 - * 大村彦次郎「敗戦の年の武林無想庵」：『季刊文科』45、鳥影社、2009（平成21）年7月31日発行、pp.12～13。
 - * 『ライブラリー・日本人のフランス体験』第5巻 パリへの憧憬と回想—『あみ・ど・ぱり』Ⅲ（西村将洋編）、2009（平成21）年。
 - * 『ライブラリー・日本人のフランス体験』第18巻 文学者のフランス体験Ⅰ —1929（山崎眞紀子編）、柏書房、2011（平成23）年。
 - * 七北数人「坂口安吾年譜」：『坂口安吾全集』別巻、2012（平成24）年。
 - * 渡辺喜一郎「石川淳伝記的年譜」：『石川淳傳説』、右文書院、2013（平成25）年。
 - * 『西条八十全集』別巻（著作目録 年譜）、国書刊行会、2014（平成26）年。
- 戦後の大阪と宮田文字の店「ミスタンゲット」については当時大阪で勤務されイヴォンヌにも会っておられる小島正次氏（長谷虎紡績大阪営業所）の懇切なご教示を得ました。記して謝意を表します。